桜

岡本かの子

青空文庫

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命(いのち)をかけてわが眺(なが)めたり

さくら花(ばな)咲きに咲きたり諸立(もろだ)ちの棕梠(しゅろ)春光(しゅんくわう)にかがやくかたへ

この山の樹樹(きぎ)のことごと芽ぐみたり桜のつぼみ稍(やや)ややにゆるむ

ひっそりと欅大門(けやきだいもん)とざしありひっそりと桜咲きてあるかも

丘の上の桜さく家(いへ)の日あたりに啼(な)きむつみ居(を)る親豚子豚

ひともとの桜の幹(みき)につながれし若駒(わかごま)の瞳(め)のうるめる愛(かな)し

淋しげに今年(ことし)の春も咲くものか一樹(ひとき)は枯(か)れしその傍(そば)の桜

春さればさくらさきけり花蔭(はなかげ)の淀(よど)の浮木(ふぼく)の苔(こけ)も青めり

ひえびえと咲きたわみたる桜花(はな)のしたひえびえとせまる肉体の感じ

散りかかり散りかかれども棕梠の葉に散る桜花(はな)ふぶき溜(たま)るとはせず

ならび咲く桜の吹雪(ふぶき)ぽぷらあの若芽(わかめ)の枝の枝ごとにかかる

わが庭の桜日和(びより)の真昼なれ贈りこしこれのつやつや林檎(りんご)

青森の林檎の箱ゆつやつやと取り出(い)でてつきず桜花(はな)の樹(こ)のもと

林檎むく幅広(はばひろ)ないふまさやけく咲き満(み)てる桜花(はな)の影うつしたり

地震崩(なゐくづ)れそのままなれや石崖に枝垂(しだ)れ桜は咲き枝垂れたり

しんしんと桜花(さくら)かこめる夜(よる)の家突(とつ)としてぴあの鳴りいでにけり

しんしんと桜花(はな)ふかき奥にいつぽんの道とほりたりわれひとり行(ゆ)く

せちに行けかし春は桜の樹下(こした)みちかなしめりともせちに行けかし

さくら花ひたすらめづる 片心(かたごころ) せちに敵(かたき)をおもひつつあり

朝ざくら討たば討(う)たれむその時の臍(ほぞ)かためけりこの朝のさくら

あだかたきうらみそねみの 畜生(ちくしやう) が桜花(さくら)見てありとわれに驚く

わが婢(はした)なにおもふらむ 廚辺(くりやべ)の桜花(はな)の樹(こ)のもとにあちらむき停(た)てり

この朝の桜花(はな)の樹(こ)のもと小心の与作(よさく)ものつと歩み出でたり

わが幼稚(をさな)さひたはづかしし立ち優(まさ)り咲き揃(そろ)ひたる春花(はるはな)なれや

咲きこもる桜花(はな)ふところゆ一(ひと)ひらの白刃(しろは)こぼれて夢さめにけり

わがころも夜具(やぐ)に仕換(しか)へてつつましく掻(か)い寝(いね)てけり月夜(つくよ)夜ざくら

角(つの)立ちのみじかきからに牛の角(つの)つのだち行けどふれずさくらに

いみじくも枝垂(しだ)るるさくら日(ひ)の本(もと)の良子女王(ながこによわう)が素直(なほ)きおん眉(まゆ)

可愛(かあ)ゆしといふわが言の畏(かし)こけれ桜花(さくら)見ますかわが良子ひめ

新しき家居(いへゐ)の門(かど)に桜花(はな)咲けど夜(よ)を暗み　提灯(ちやうちん)　つけて出(い)でけり

桜花(はな)さける道は暗けど一(いっ)しんに提灯ふりて歩みけるかも

わが持てる提灯の炎(ひ)はとどかずて桜はただに闇(やみ)に真白し

いつぽんの桜すずしく野に樹(た)てりほかにいつぽんの樹もあらぬ野に

桜ばな暗夜(やみよ)に白くぼけてあり墨一色(すみいっしき)の藪(やぶ)のほとりに

つぶらかにわが眼(め)を張(は)ればつぶつぶに光こまかき朝桜かも

ひんがしの家(や)の白かべに八重(やへ)ざくら淋漓(りんり)と花のかげうつしたり

さくら咲く丘のあなたの空の果て朝やけ雲の朱(しゅ)を湛(たた)へたり

わだつみの豊旗雲のあかねいろ大和島根の春花に映ゆ

ひさかたの光のどけし桜ちるここの丘辺を過ぐる葬列

ほそほそと雫しだるる糸ざくら西洋婦人濡れてくぐるも

糸桜ほそき腕がひしひしとわが真額をむちうちにけり

わが家の遠つ代にひとり美しき娘ありしといふ雨夜ざくら

真玉なす桜花のしづくに白黒のだんだら犬がぬれて停ちたり

折々にしづくしたたる桜花のかげ女靴のあとのとびとびに残る

ほそほそと桜花の奥より見えて来る灯にまさりたる淋しき灯なし

桜花(はな)の奥なにたからかに語り来る人ありて姿なかなか見えず

糸杉(いとすぎ)のみどり燃えたりそのかたへふわふわ桜咲き白(しら)むかも

桜さく丘にのぼれば遠(をち)かたの松ふく風の声かそかなり

この丘の桜花(さくら)のもとゆ見はるかす遠松原(とほまつばら)のほのぼのしかも

松の間(ま)に桜さきたり松の葉の黒きひまよりうす紅(べに)ざくら

ミケロアンゼロの憂鬱(いううつ)はわれを去らずけり桜花(さくら)の陰影(かげ)は疲れてぞ見ゆれ

桜花(はな)あかりさす弥生(やよひ)こそわが部屋にそこはかとなく淀(よど)む憂鬱

かなしみがやがて黒める憂鬱となりて術(すべ)なし桜花(はな)のしたみち

早春の風ひようひようと吹きにけりかちかちに莟(つぼ)む桜並木(なみき)を

かちかちにつぼむ桜の樹下(こした)みちしなび蜜柑(みかん)を曳(ひ)いて通るも

さくら咲くあかるき外(と)には立ちにけりわが衣(きぬ)の皺(しわ)にはかに著(しる)し

仁丹(じんたん)の広告灯が青くまた赤く照(てら)せり夜(よ)の桜ばな

桜花軒場(さくらばぬきば)に近し頬(ほ)にあつるかみそりの冷えのうすらさびしき

山川のどよみの音のすさまじきどよみの傍(そば)の一本(ひともと)桜

桜花(はな)さけど廚女(くりや)房いつしんに働きてあり釜(かま)ひかる廚

裏庭のひよろひよろ桜てふずばの手ふき手ぬぐひ 薄(うすよご)汚れたり

しんしんと家をめぐりて桜さくおぞけだちたり夜半(よは)にめざめて

けふ咲ける桜はわれに要(えう)あらじひとの嘘(うそ)をばひたに数(かぞ)ふる

さかんなる桜はわれになまぬるき「許しの心」あに教ふべしや

薄月夜(うすづくよ)こよひひそかに海鳥(うみどり)がこの丘(をか)の花をついばみに来(こ)む

この丘に桜散る夜(よ)なり 黒玉(ぬばたま)の海に白帆(しらほ)はなに夢むらむ

夜(よ)は夜とて闇の小床(をどこ)に淡星(あはぼし)と語らふものか小(こ)ざくら桜

こよひわきて桜花(はな)の上なる暗空(やみぞら)に光するどき星ひとつあり

ひとり見る山ざくらばな胃を病(や)みてほろほろ苦き舌を含(ふふ)めり

ねむたげな桜並木(なみき)を一声(ひとこゑ)の汽笛(きてき)の音がつつ走りけり

駅前の石炭の層にうらうらと桜花(はな)ちりかかる真昼なりけり

自動車の太輪(ふとわ)の砂塵(さぢん)もうもうとたちけむりつつ道の辺(べ)の桜

真白なる鶏(くだかけ)ひとつ今朝(けさ)みれば血に染(そ)みてあり桜花(はな)の樹(こ)のもと

空高く桜咲けどもわがたどる一本の道は岩根(いはね)こごしき

さくらばな咲く春なれや偽(いつは)りもまことも来よやともに眺(なが)めな

日の本の春のあめつち豪華なる桜花の層をうちに築きたり

おのづから蔭影こそやどれ咲き満てる桜花の層のこのもかのもに

にほやかにさくら描かむと春陽のもとぬばたまの墨をすり流したり

にほやかにさくら描きておみな子も金もうけむとおもひ立ちたり

おみな子の金もうくるを笑はざれ日本のさくら震後の桜

日本の震後のさくらいかならむ色にさくやと待ちに待ちたり

金ほしきおみなとなりて眺むれど桜の色は変らざりけり

金ほしき今年の春のおのれかもいやうるはしと桜をば見つ

このわれや金とり初(そ)めの日(ひ)の本(もと)の震後の桜花(はな)の真盛りの今日(けふ)

停電の電車のうちゆつくづくと都(みやこ)の桜花(はな)をながめたるかも

桜さく頃ともなればわきてわが疲(つか)るる日こそ数は多けれ

かろき疲れさくらさく椽(えん)にかりそめの綻(ほころ)びもわがつくろはずけり

しばたたきうちしばたたき眼(め)を病(や)めるわれや桜をまともには見ず

さくら花(ばな)まぼしけれどもやはらかく春のこころに咲きとほりたり

うつらうつらわが夢むらく遠方(をちかた)の水晶山に散るさくら花

うちわたす桜の長道(ながて)はろばろとわがいのちをば放ちやりたり

外(と)の面(も)には桜盛(さか)るをわが瓶(へい)の室咲(むろざ)きの薔薇(ばら)ははやもしぼめり

真黒くわれ動(うごか)ざりあしたより桜花(はな)は窓辺(まどべ)に散りに散れども

ひそかなる 独言(ひとりごと) なれけふ聞きてあすは忘れよひともと桜

遠稲妻(とほいなづま)そらのいづこぞうちひそみこの 夜桜(よざくら) のもだし愛(かな)しも

かきくもる大空のもとひそやかに息づきにつつこの丘の桜

かそかなる 遠雷(とほいかづち) を感じつつひつそりと桜さき続きたり

なごやかに空くもりつつ咲き盛る桜を一日うち和めたり

気難かしきこの家の主人むづかしき顔しつつさくら移植させて居り

歌麿の遊女の襟の小桜がわが傘にとまり来にけり

政信の遊女の袖に散るさくらいかなる風にかつ散りにけん

うたかたの流れの岸に広重が現の桜花を描き重ねたり

咲き倦みて白くふやけし桜花のいろ欠伸かみつつわが見やりたり

みちばたのさくらの太根玉葱を懇いだきわがいこひたり

ほろほろと桜ちれども玉葱はむつつりとしてもの言はずけり

何がなしかなしくなれりもの言はぬ玉葱に散り散り滑(すべ)るさくら

ここに散る桜は白し玉葱の薄茶(うすちゃ)の皮ゆ青芽(あをめ)のぞけり

春浅しここの丘辺(をかべ)の裸木(はだかぎ)の桜並木(なみき)を歩(あゆ)みつつかなし

さくら木のその諸立(もろだ)ちのはだか木にこもらふ熱を感ぜざらめや

松の葉の一葉(ひとは)一葉に濃(こま)やけく照る陽(ひ)のひかり桜にも照る

若竹(わかたけ)のあさきみどりに山ざくら淡淡(あはあは)と咲きて添(そ)ひ樹(た)てるかも

桜花(さくらばな)ちりて腐(くさ)れりぬかるみに黒く腐れる椿(つばき)がほとり

地を撲(う)ちて大輪(たいりん)つばき折折(をりをり)に落つるすなはち散り積むさくら

大寺(おほでら)の庭に椿は敷(し)き腐り木蓮(もくれん)の枝に散りかかる桜

ぼたん桜ここだく樹(た)てり尼(あま)たちが紐(ひも)かけ渡し白衣(びやくえ)干(ほ)すかも

鬱(うつ)として曇天(どんてん)のしたに動かざり梢(こずゑ)のさくら散り敷けるさくら

どんよりと曇天に一樹(ひとき)立つさくら散るとしもなく散る花のあり

一天(いつてん)は墨(すみ)すり流し満山(まんざん)の桜のいろは気負(きお)ひたちたり

見渡せば河しも遠し河しもの瀬瀬(せぜ)にうつれる春花(はるはな)のかげ

急阪(きふはん)のいただき昏(くら)し濛濛(もうもう)と桜のふぶき吹きとざしたり

さやさやと竹さやぐからに出(い)でて見ればしんと桜が咲き居(ゐ)たるかも

塔(たふ)の沢のいかもの店に女唐停(めたうた)ちその向(むか)つ峰(を)の桜花(はな)盛りなり

いかものを女唐買ひたりその女唐箱根の桜花(はな)の下みちを行く

わがままはやめなとぞおもへしかはあれ春さり来れば桜さきけり

桜花(はな)の山は淡墨(うすずみ)いろに暮れにけり大烏(おほがらす)一羽ひつそり帰る

大暴風(おほあらし)うすずみ色の生壁(なまかべ)にさくら許多(ここだ)くたたきつけたり

ここにして桜並木(なみき)はつきにけり遠浪(とほなみ)の音かそかにはする

桜花(はな)の山はうしろに高し見はるかす淡墨いろのたそがれの海

いそがはしく吾(われ)を育ててわが母や長閑(のど)に桜も見で逝(ゆ)きませしか

十年(とせ)まへの　狂院(きやうゐん)　のさくら　狂人(きちがひ)　のわれが見にける狂院のさくら

狂人のわれが見にける十年まへの真赤きさくら真黒きさくら

狂人(きちがひ)よ　狂人(きちがひ)よとてはやされき桜花(さくら)や云(い)ひし人間(ひと)や笑ひし

ふたたびは見る春無(な)けむ　狂人(きちがひ)　のわれに咲きけむ炎の桜

わが夫(つま)よ十年(とせ)昔のきちがひのわが恐怖(おそれ)たる桜花(はな)あらぬ春

ねむれねむれ子よ汝(な)が母がきちがひのむかし怖れし桜花(はな)あらぬ春

人間の交友(まじわり)のはてはみな儚(はか)な桜見つつし行きがてぬかなし

（来よと宣(の)らせる佐藤春夫氏に厚く謝しつつ）

桜花(はな)あかり厨(くりや)にさせば生魚鉢(なまざかなはち)に三ぼん冴(さ)えひかりたり

生ざかな光りて飛べりうす紅(べに)の桜の肌の澄(す)みの冷たさ

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ
　　1999（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集　第八巻」冬樹社
　　1976（昭和51）年4月15日初版第1刷発行
初出：「中央公論」
　　1924（大正13）年4月号
※「椽《えん》」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2004年2月17日作成
2013年10月5日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桜

岡本かの子

２０２０年　７月１８日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/